

## M14b 次期太陽風観測衛星 SWFO-L1 地上局の整備

久保勇樹, 塩田大幸, 山川浩幸 (情報通信研究機構)

24時間365日、途切れることなく太陽風をリアルタイムに監視することは、宇宙天気予報を行う上で極めて重要である。惑星間空間で太陽風を直接監視するために、1997年に Advanced Composition Explorer (ACE) 探査機が第一ラグランジュ点 (L1 点) に打ち上げられ観測を開始した。その後、ACE の後継機として Deep Space Climate Observatory (DSCOVR) が同じく L1 点に打ち上げられ、2015年から太陽風の監視を続けている。

これらの探査機は、L1 点に位置していることから、地上の夜間には、データをダウンリンクすることが出来ないため、24時間365日のリアルタイム監視を実現するためには、国際協力が必須である。現在、情報通信研究機構 (NICT) は、Real-time Solar Wind Net と呼ばれる ACE 及び DSCOVR のリアルタイム受信地上局の国際ネットワークの一拠点として太陽風の24時間365日監視に貢献している。

DSCOVR は打ち上げ後既に8年が経過し、現在、米国 NOAA 主導で2025年打ち上げを目指して、DSCOVR 後継機 SWFO-L1 計画が進んでいる。SWFO-L1 も SWFO Antenna Network (SAN) と呼ばれるリアルタイム太陽風監視ネットワークが組織されることになっている。NICT は NOAA から SAN への参加を打診され、SAN の一拠点として SWFO-L1 地上局の整備を進めている。

本ポスターでは、NICT 鹿島宇宙技術センターに整備中の、次期太陽風観測衛星 SWFO-L1 地上局整備の進捗状況について報告する。